

災害看護に対するK病院の看護師の意識調査

—Eナースの役割と今後の活動に向けて—

○ 大島 美智子 壬生 季代 中村 美和 宮井 千恵

キーワード：意識調査、Eナース、Eナースの役割

I. はじめに

高知県では、平成7年に発生した阪神・淡路大震災を受けて、平成8年7月に行政・民間の枠を超えた高知県災害救急医療体制検討会が発足され、大規模災害を想定した救急医療体制のあり方の骨子がまとめられた。平成9年7月には、具体的な行動指針として、「高知県災害救急医療活動マニュアル」が作成された。

K病院は高知県災害対策の高知市支部に属し、災害支援病院の役割を担っている。この支援病院の下に補完病院11病院、救護所16カ所あり、これらが高知市支部に含まれている。また、高知県登録現場医療チームとして、医師2名・看護師4名・薬剤師1名を1チームとして、3チームを編成し高知県に登録している。

平成13年に、今後発生が懸念されている南海大地震や大規模災害に備え、行動できる看護師が多く必要であるという見解から、K病院内看護師より希望を募り、自発的に名のりを挙げた看護師23名と高知県登録現場医療チームの看護師12名で院内編成現場看護チーム（エマージェンシーナース）を結成した（以下Eナースとする）。

Eナースとして、災害時の対応についての学習会や院内における災害訓練に積極的に参加するなどの活動を行っているが、組織作りは不十分であり役割も明確にされていない現状がある。

II. 調査目的

今回の調査目的は、

1. K病院看護師を対象に災害時の看護の準備状況に関する意見を聞き、実態を把握すること
 2. 災害時の看護を行っていくうえでの準備状況に対する問題点および課題を見出すことと、Eナースの役割を検討すること
- の2つである。

III. 調査方法

1. 調査期間

2004年1月15日～25日

2. 調査対象者

Eナースを含む K病院看護師 346名

3. 調査方法

研究の主旨を説明した用紙と独自に作成した質問紙を看護師に配布し、無記名で調査用紙への記入を依頼した。倫理的配慮は研究の主旨を説明した用紙に記載した。また、Eナースには別に質問を追加した。

4. データ分析方法

①データ収集、②職位別・Eナース別に割合算出した。

5. アンケート内容

看護師の年齢、職位などの属性、災害時の看護体験として、①災害看護への興味、②災害の経験、③災害看護の経験、④救護活動への参加の希望

災害時の体制については、①K病院の役割の認識、②所属部署での指揮命令系の整備状況、③「高知県災害救急医療マニュアル」の認識、④「K病院の災害時における対応マニュアル」の認識、⑤「災害時における対応マニュアル」の認識、⑥緊急時の連絡網の整備状況、⑦部署での防災マニュアル作成状況、⑧避難経路の認識

災害に対する意識として、①災害時看護の役割について、②物品の安全を考慮した配置、③医療物品が不足

した場合の代用品を考えているか、④自宅での非常持ち出し品の準備状況、⑤交通手段が遮断された場合での出勤希望、⑥災害に関する講演や研修の参加希望

また、Eナースには、①活動内容の認知、②Eナースとしての自覚、③Eナースの襟章、④会への出席、⑤編成チームの認知、⑥災害教育活動の実践、⑦講演や研修への参加、⑧携帯品の準備、⑨災害弱者を判断する基準の認知、⑩医療物品や器材の準備が可能か、⑪救急処置が可能か、⑫対応マニュアルの活用が可能か、⑬部署での緊急時の連絡網の確認、⑭安全な避難場所への誘導が可能か、⑮訓練の経験（担架、トリアージ等）を別に質問した。

IV. 倫理的配慮

質問紙の配布に当り、調査の趣旨および無記名であり、個人を特定するものでないこと、回答は任意であること、調査以外の目的に使用しないことを文章に明記し同意を得た。

V. 調査結果

回答は、Eナースを含む346名中295名から回答を得、回答率は85%であった。

1. 職位別による検討

職位別に見ると、看護師長7%、副看護師長14%、看護師77%で、職位無回答が2%あった。

「災害にあったことがありますか」という質問の項では、半数近くの者が被災経験あり、その種類としては、自然災害（台風や水害）がほとんどをしめ、92%であった。

「災害看護に興味がありますか」という質問では、看護師長47%、副看護師長67%、看護師71%であり、職位別に有意差はなかった。「災害時の看護に携わったことがあるか」という質問ではほとんどの看護職員が実際の災害看護活動を体験していない。

2. EナースとEナース以外との比較検討

「災害看護への興味（91%：70%、 $p < 0.05$ ）」、「災害発生時の救護活動へ参加の希望（100%：90%、 $p < 0.05$ ）」、「高知県における本院の役割を知っている（83%：51%、 $p < 0.01$ ）」、「高知県災害救急医療活動マニュアルを知っている（72%：37%、 $p < 0.01$ ）」、「本院のマニュアルを知っている（87%：59%、 $p < 0.01$ ）」、「災害看護の役割を知っている（78%：58%、 $p = 0.06$ ）」、「災害に対する講演や研修に参加（52%：19%、 $p < 0.01$ ）」。「災害看護への興味、災害看護の経験や災害発生時の救急活動への参加の希望は、EナースはEナース以外の一般看護師より有意に多くみられている。

災害時看護体制の認識では、「高知県におけるK病院の役割を知っている」、「高知県災害救急医療活動マニュアルを知っている」、「K病院の災害時における対応マニュアルを知っている」、など看護の体制に対する意識は有意にEナースで高いという結果であった。しかし、指揮命令系の整備状況や部署での防災マニュアル作成など、やはり部署に関連する項目は差を認めなかった。

災害看護に対する意識では、「医療物品不足時の代用品を考えている」「自宅において非常持ち出し品を準備している」「災害に対する講演や研修に参加」、など有意にEナースで高いという結果であった。

3. Eナースを対象にした質問の結果

「Eナースとしての自覚」は64%とあまり高くないにしても、「緊急連絡網の確認」や「災害発生時の避難場所への誘導」は「できる」「少しならでき」を合わせるとEナースの80%近くが可能という回答であった。しかし、Eナースの会への出席、災害教育活動の実践、携帯品の準備、医療物品や器材の準備が可能か、などは、20-33%と低率である。

4. 結果のまとめ

職位による検討では、連絡網の整備や防災マニュアル作成、物品の配置など、所属する部署での作成ができていないことがわかった。

Eナース別による検討では、Eナースは災害看護への意識は高いが、指揮命令系の整備状況や部署での防災マニュアル作成、物品の配置など、これも部署に関連する項目は差を認めないことがわかった。また、EナースでもEナースの会への出席、災害教育活動の実践、携帯品の準備、医療物品や器材の準備が可能かなどは20-33%と低率であることがわかった。

VI. 考察

今回、アンケート調査を行いEナースとEナース以外の一般看護師と比較検討し、災害看護に関する意識について認識度が高い有意差が見られ、今後Eナースを中心として、看護職員全体の災害看護に対する意識の向上を図る必要があると思われた。そのためにEナースの役割として、災害発生時の「各部署における指揮命令系統の整備」と「各部署間での連携の強化」を図ることを最重要課題として取り組む必要があると考えられた。

災害発生時に看護が有効かつ適切に機能する為には、防災マニュアルの実効性が必要と考える。

VI. 今後の課題

今後Eナースを中心として、看護職員全体の災害看護に対する意識の向上を図る必要がある。そのためにEナースの役割として、災害発生時の「各部署における指揮命令系統の整備」と「各部署間での連携の強化」を図ることを最重要課題として取り組みたい。

参考文献

- 1) 鎌田美千子他：災害拠点病院に勤務する看護職者の災害看護に関する意識調査，日本災害看護学会誌，5(1)，51，2003.
- 2) 高知県災害看護支援ネットワーク検討会：災害・その時看護は～災害看護のガイドライン～社団法人高知県看護協会，1-2，9-10，2003.
- 3) 高知県災害時看護支援ネットワーク検討会：平成11年度 高知県職員提案事業 - 「災害時看護支援ネットワーク研究」報告書，2001.
- 4) 高知県災害看護支援ネットワーク検討会：災害看護支援ネットワークの実行化，2003.

〔平成16年7月30・31日 日本災害看護学会 第6回年次大会（高知）にて口頭発表〕